



毛栗膝線手山

SHINBASHI

新橋

東京では「橋」のついた地名の町がとんとんさびれていく。

これは私鉄不動産合体財閥企業の陰謀に違いない……。

テクニカルライター

第16回

小田嶋 隆

大江戸八百八橋……

新橋、京橋、日本橋、呉服橋、江戸橋、柳橋、浅草橋、と、千代田区、中央区から台東区にかけての旧江戸の中心街には、橋のつく地名がずらりと並んでいる。

なるほど「大江戸八百八橋」と言ったように、まことに江戸は運河と橋の町であった……なあんてことは実はどうでも良いのである。

問題は「橋」の語感だ。

つまり、私が言いたいのは、地名の末尾に「橋」がついていると、なんとなくその町がドブ臭い場所であるような感じがしてしまうのは、こりゃ一体どういふことなのか、ってことだ。

そうなのである。橋とは、地名の構成要素として、どうやらあまり望ましいものではないのだ。

昔といっても東京の川が充分にきれいだった頃の話だから何十年前のことになるが(はこうではなかったはずだ)。

川端康成に「川のある下町の話」という小説があるがこの小説が書かれた頃には「川」とか「橋」とか「土手」といふ言葉にはもつと違った風情が含まれていたはずなのだ。

たとえば初夏の夕刻は、川べりに涼風が流れたはずだし、その風は、当然、一片の重油の匂いも含んでいなかった。そして、土手の斜面に腰掛けて夕涼みをしている少女の長い髪は、どこからどう考えてみても、たおやかになびかなかったはずはないのである。

ところが、わが平成の東京の川風は、メタンガスと廃油とアオミドロの匂いを乗せて、ビルとの間のひねこびた通路を巻き上げながら通り抜けて行く。であるから、もちろんそんな場所ですら涼みをする少女なんてものはいるはずがないし、いたところでそういう女の奥歯には、いじきたなく食べ散らかしたピザの切れっばしはさまっているに決まっているのだ。

「○○丘」が高級住宅地ってか

環境破壊の話をしているのではない。

私は、不動産屋の陰謀の話をしているつもりだ。つまり、具体的に言うと、「主に東京の西半分を拠点に土地開発事業を展開した私鉄不動産合体財閥企業の連中がこなした悪質な水辺蔑視思想定着活動の成果」の話を私はしているわけなのだ。

川は水害と病原菌と公害の源泉であり、海拔高度の低い所に住むのは貧乏人でありまして、ですから丘の上に住むのなければ貴族階級とはいえないでござあますのよ、というこの思想は、決して確かな伝統を持ったものではない。せいぜい戦後半世紀足らずの間に醸成されたプチブル根性の典型例であるに過ぎない。

欧米の事情はいざ知らず、わが国では、いや、もっと範囲をせばめて少なくとも東京では、言い直しても良いが、少なくとも我が東京では、山の方に住んでいる人間は田舎者だったのである。

「なんでえ、おめつちのところに橋もないってか」ってえくらいなもの、何が悲しいといつて、江戸っ子が、運河も掘ってないような山奥に追い

やられるほど悲しいことはないはずなのである。

しかし、それでも大手不動産屋たちは「○○丘」や「○○台」こそが高級住宅地だ、という宣伝を怠らなかつた。なぜかといえば、彼等がどう土地を売ろうと思っても、東京で土地が余っていたのは内陸の台地ばかりだったからだ。海辺や川べりの「等地」(とあえて言うぞ、オレは)には、すでに由緒正しい江戸っ子が住んでいて、新しく東京に出てきた作蔵だの捨吉すれに分けてやれるような半端な地面は、草深い「山の手」にしか残って

なかつたからだ。

であるからして、彼等、鉄地複合体制(鉄道および地上複合企業体は「郊外」という耳障りの良い言葉を発明した。そして、それをムジナが出るような二毛作の大根畑に当てはめる一方で、返す刀で東半分の旧東京を「水っぺり」呼ばわりにし、そのイメージの低下を促し続けたのである。

ひがみのスケール

……と、何かにつけて私が繰り返しているこの主張は、考えてみれば「東京者」という、結局の

ところ東京において最も田舎臭い存在におちがれてしまった存在である私のような者だけが抱いている、一種のひがみのなかもしれない。

このことは認めても良い。しかしながら、地方出身者にだって地方出身者のひがみがあるはずだ。

たとえば、東京の西半分を造成した張本人である五島某太や堤某次郎のような人々は、地方出身者であつたが、その彼等には「東京者だけが集まって田舎者いびりをしてる旧東京体制」に対する敵意があつたはずだと私は思っている。

だからこそ彼等は「よおーい、そんならオラが新しい東京を作つてやるから覚悟してやがれ」と決意したのであり、そうやって出来たのが、田園調布であり所沢であり多摩プラーザであり、つまりは現在の東京であるわけなのだ。

うむ。とすると、ひがみのスケールとして、明らかに彼等の方が大きい。それに、おなじひがみとは言つても性質がまるで違う感じもする。

なにより、我々東京出身者がもつたら過去の東京や少年時代の東京に拘泥しているのと比べて、彼等地方出身者は東京に自らの未来を見ている。

結局、我々にとつて「過去」と分かち難く結び付いてしまつて「東京」というこの懐かしい言葉も、彼等の側から見れば「未来」と同義語になつて

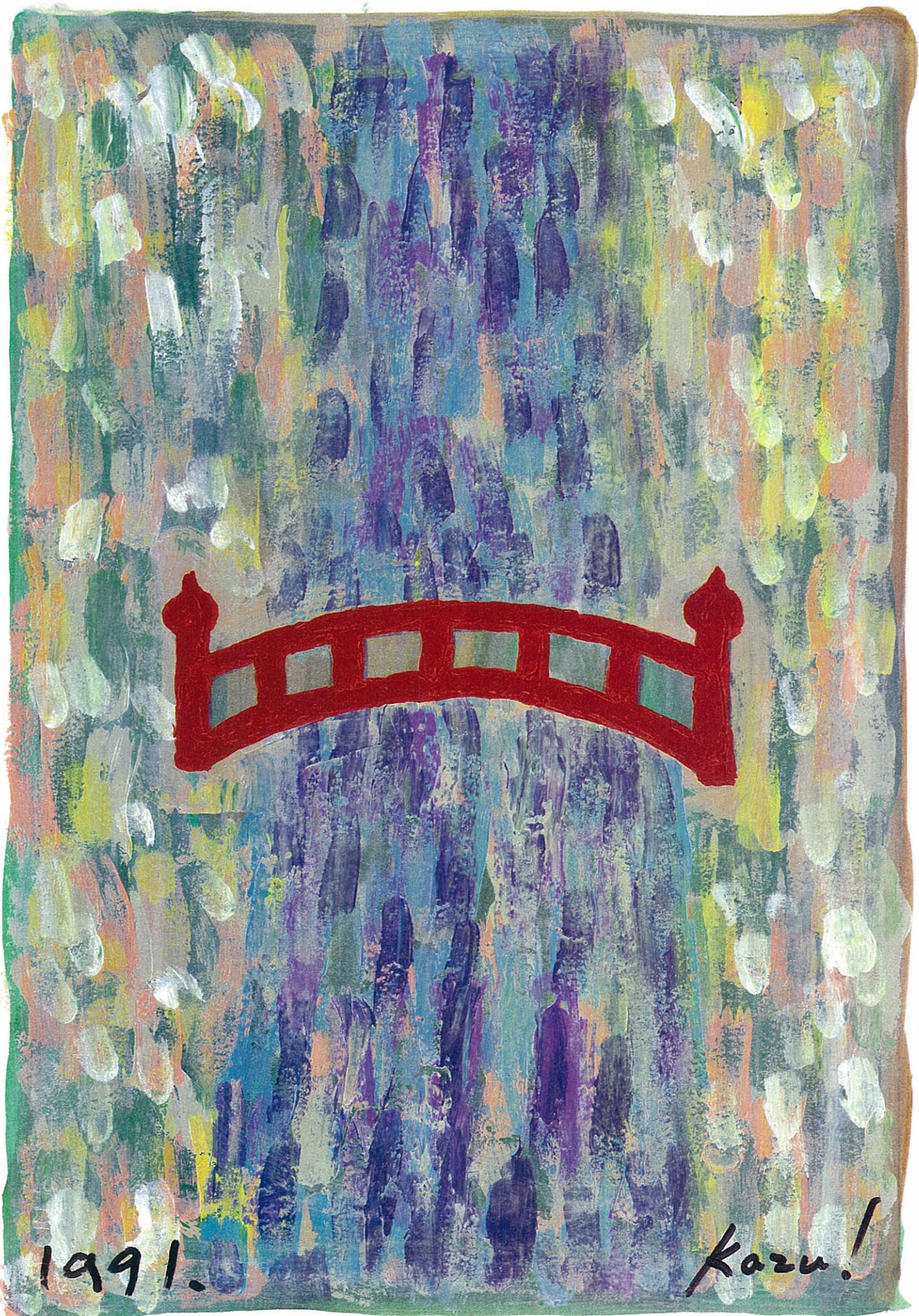
いるわけだ。

これでは、はなつたら勝負にならない。だって、男女関係という希有な例外を除けば、未来と過去の勝負は、必ずや未来が勝利をおさめることになつて

いるのだから。

よろしい。わかりました。新橋や日本橋のような橋のたもとの由緒正しい江戸の町が、なんとなくさびれていくのと歩調を合わせるように、我々東京の人間もまた、徐々に過去の存在になつていくのでありましよう。

よろしいですとも、いずれにしろあんなたち都会派の連中には、過去が未来に比べてどんなに素敵かつたことはわかりっこないんだ。



1991.

Kazu!